

自然的環境の野菜の村

波野村は、熊本県の最東端に位置し、阿蘇外輪山をその母体として、西部から、東部へ波状傾斜をなしており、標高が概ね、六〇〇〜九〇〇mの高地で、東西に七km、南北に十km、総面積七一、四六畝を有し、西は外輪山をもって、一の宮町、南は高森町、東は大分県竹田市及び荻町、北は産山村とその境をなし、戸数五七二戸、人口二三八六八人（昭和五十年国調）の自然的環境の純農村地帯です。

本村は、細川藩時代六区の行政区に区分され、それぞれ村を形成していましたが、明治二十二年町村制施行により六区画の村を大字として村を形成し、地形が東西にゆるやかな波状傾斜をなし、その景観が、大波のうねりのごとく見え、吹く風になびく「すずき」の穂がさざなみのような草原であるため、波野村と改名されました。

隣接する村との合併が一応考えられましたが実現に至りませんでした。

昭和二年に国鉄豊肥線が村の中央部を、東西に横断し村内に、波野、滝水の二つの駅が設置され日常生活に大きな利便と、経済発展の基礎づくりとなりました。本村のごとき山間へき地においては経済成長の波はいち早く押し寄

せ、昭和三十年代から昭和四十年代にかけて若い人々を中心にした人口流出が続き過疎地域となりましたが、その後道路交通網の整備と、産業基盤整備の振興などにより生活の様相も一変し人口の流出も近時鈍化の傾向にむかっています。

高冷地野菜 産地銘柄の確立

村の基幹産業は、農業が主ですが、なかでも高冷地野菜（キャベツ、ハクサイ、大根）と畜産が最も盛んです。昭和四十六年以降農業の生産基盤を確立するため、第二次農業構造改善事業を初めとして、肉用牛生産団地育成事業、畑作高度営農団地育成事業などにより農道、牧道の改良舗装、農地造成、草地造成事業を進め、機械施設の導入により、造成された畑地には、高率的に、そ菜栽培が行われています。

夏秋野菜の主産地である本村は、今産地銘柄の確立と、安定市場の確保を目指して、村を挙げて取り組んでいます。

高冷地という自然条件を生かした夏秋キャベツ、夏ハクサイ、ダイコン、夏秋レタス、なかでもキャベツはここ五年間に約五倍の伸びを見せ、二百ヘクタール

強約六千トンの生産を上げています。しかし不安定な野菜相場と安値に泣かされることも多く、そのうえ、生産量の大半が個人売買となっていたことが安定収入を欠く大きな原因にもなっていました。そこで強力な共販体制の確立に、村、農協、生産農家が一九七〇年になって取り組んでいます。

このほか繁殖牛千百三十五頭、肥育牛百二十五頭が飼養されており、畜産の粗生産額は二億三千万円にも達し主要産業中二番目の所得高を示しています。近時野菜畑の連作障害や、いや地現象等が見受けられ、土づくりに欠くことのできな

い堆肥の増産をはかり、地力の維持増進を進め従来からの野菜プラスチック資材の営農形態は本村での最も重要な営農類型となつています。

また土地及び気象条件からも、森林資源に恵まれているため、昭和五十二年から第二次林業構造改善事業に取り組んでいます。林業経営の改善をはかりながらの村産業一翼を担う主要な産業とするため、林道の開設、トラクターの導入、基幹作業道、山元貯木場、椎茸生産施設山菜栽培等の事業を取り入れ年次計画で実施しています。

明るく健康な村づくり

□村民総合運動場の建設

生活様式や、労働近代化で生ずる余暇

の有効な利用が高まっているのでこのような需要に対応するため五十二年度から約三ヘクタールの用地を買収現在工事中です。五十三年度中には、ナイター施設等を完備した村民総合運動場が完成します。

名所・旧跡 観光・文化

特に名高い名所旧跡はないが縄文式文化時代の遺跡として千部隊遺跡、牛首遺跡、茶臼塚古墳等があり時折土器類が発見されました。

観光では、熊本三十六景の一つに選定された波野高原は、「わらび狩り」の格好の場所シーズンには職場グループ家族連れが臨時列車や、バス、自家用車で訪れ高原の春の空気をいっぱい吸い込み楽しんでいきます。

また昭和四十九年に「すずらん」の群生地（約一ヘクタール）が発見されたので珍しいこの花を一人でも多くの人が末ながく観賞できるよう保護に努めています。

中江の岩戸神楽は、国の選択無形文化財として指定されており、村内の各種行事はもろろん他町村の祭典などに参加し広くその名を知られています。

近年は、各地域に古くから伝えられた伝説を継承する空気がみられ、農業後継者等の育成とあわせ夜間等を利用してさかんに活動しています。



▲自然条件を生かした高冷地野菜は村の基幹産業



▲野菜と組み合わせた畜産は地力の維持増進を図る



▲国の選択無形文化財「中江の岩戸神楽」